

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-133	A-153	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名 (原題/訳)</b>		
<p>Examining the association between psychological distress and alcohol use in Australian adolescents over a period of declining consumption                      アルコール消費量が減少している期間におけるオーストラリアの青年の心理的苦痛と飲酒との関連の調査</p>		
<b>執筆者</b>		
Cerocchi N, Mojica-Perez Y, Livingston M, Arunogiri S, Pennay A, Callinan S.		
<b>掲載誌</b>		
Drug Alcohol Rev. 2024 Mar;43(3):633-642. doi: 10.1111/dar.13703.		
<b>キーワード</b>		<b>PMID</b>
青少年、飲酒、メンタルヘルス、心理的苦痛		37399136
<b>要 旨</b>		
<p><b>目的：</b> 青少年の飲酒と心理的苦痛の関連は正の関連があることが認識されているが、飲酒率は過去 15 年間で減少している一方で、自己申告による心理的苦痛は増加している。本研究の目的は、飲酒率が低下している 2007 年から 2019 年間で、青少年における心理的苦痛と飲酒の傾向を分析することと、この間での両者の関連の強さが変化したか、またどのように変化したかを明らかにすることである。</p> <p><b>方法：</b> 対象は 2007 年から 2019 年まで 3 年毎に全国薬物戦略世帯調査 (National Drug Strategy Household Survey) を完了した 14~19 歳のオーストラリア人 6543 人であった。調査回答から過去 12 か月の飲酒の有無と量・頻度を得た。過去 1 か月の心理的苦痛は、10 項目の K10 尺度で測定し、調査時期との交互作用を含むロジスティック回帰および多変量線形回帰にて、飲酒の有無、短期的リスク、および 1 日に摂取する標準的な飲酒量の平均を分析した。</p> <p><b>結果：</b> 2007 年から 2019 年にかけて、すべてのアルコール項目で該当者は減少したが、2016 年と比較すると 2019 年において増加がみられた。K10 スコアは、飲酒行動に関係なく 2007 年から 2019 年にかけて増加した。心理的苦痛レベルが高い者は低い者に比べ、過去 12 か月間に飲酒したと報告する可能性が 3 倍高く、短期的リスク飲酒を報告する可能性が 2.5 倍高くなった。ロジスティック回帰のいずれにおいても、有意な交互作用はなく時期の影響は見られなかった。多変量線形回帰では、心理的苦痛は 1 日に飲む標準的な飲酒量の正の予測因子であり、2007 年の心理的苦痛レベルが低い者に対し、苦痛レベルが高い者では 2016 年、2019 年で交互作用が有意であったが、心理的苦痛の増加と飲酒量の減少にも関わらず、全体として心理的苦痛と飲酒量の関連は安定していた。</p> <p><b>結論：</b> 心理的苦痛は飲酒の重要な予測因子であり、この関係は長期間にわたって一貫していることが確認された。心理的苦痛を経験している飲酒者の割合は、飲酒率が低下しても増加しなかったことから、青少年の飲酒の減少は、自己申告および診断された精神的健康問題の増加とは無関係に生じていることが示唆された。</p>		